

## 台湾の宜蘭クレオールにおける否定辞

— 「ナイ」と「ン」の変容をめぐる —

簡 月真

真田 信治

国立東華大学

奈良大学／国立国語研究所

**【要旨】** 台湾東部、宜蘭県の山間部に日本語とアタヤル語とが接触して形成された新しい言語が存在する。われわれは、この言語を「宜蘭クレオール」とネーミングして記述調査をおこなっている。本稿では、まず、この宜蘭クレオールの概況を説明し、社会・歴史的背景および言語的特徴から、それがまさに「クレオール」であることを示す。次に、「宜蘭クレオール」の独自の体系を示す事象として否定辞を例に考察をおこなう。考察の結果、基層言語であるアタヤル語の「既然法」「未然法」といった範疇の中に上層言語（語彙供給言語）である日本語の否定辞「ナイ」と「ン」の2形式が巧みに取り込まれ、「発話以前（既然）の事態・行為」と「発話以後（未然）の事態・行為」を、それぞれ *nay* と *ng* によって弁別して描写するといった新しい体系化が図られていることが明らかになった\*。

**キーワード：** 言語変化、クレオール、日本語、アタヤル語、否定辞

### 1. はじめに

日本の植民地統治とともに台湾に渡った日本語（標準語および地域方言・社会方言）が、現地のことばと接触しながら生き続け、多くの言語現象を生み出している。その中の一つは、日本語とアタヤル語の接触による新しい言語の形成と運用である。

この新しい言語は、台湾東部の宜蘭県大同郷と南澳郷に住む一部のアタヤル人とセデック人<sup>1</sup>によって用いられている。この言語は実際にどのように使われ、どのような構造を持ち、どのような特徴を有するのか、言語接触や言語変化の観点から見てみたいへん興味深い課題である。しかしながら、それに関する記述や分析はほとんどなく、近年になって初めて学術的な研究の対象として取り上げられるようになった（真田・簡 2007, 2008a/b, 2009, 土田 2008, 安部ほか 2008, Chien and Sanada 2010, 簡・真田 2010）。真田・簡（2007）以来、われわれはこの新しい

\* 本稿は国立国語研究所共同研究プロジェクト（基幹型）「日本語変種とクレオールの形成過程」、および第一著者の独立行政法人日本学術振興会平成 21・22 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「台湾と韓国における日本語の維持に関する社会言語学的研究」（課題番号 2109005）と台湾行政院国家科学委員会專題研究計畫『台湾殘存日語之調查研究—以宜蘭県為例（III）（IV）』（課題番号 NSC97-2410-H-259-027-MY2）による研究成果の一部であり、日本方言研究会第 90 回研究発表会（日本女子大学、2010 年 5 月 28 日）での研究発表に基づくものである。関係機関各位および御意見を賜った方々に感謝する。また、有益なコメントをくださった査読者の方々にもお礼を申し上げたい。

<sup>1</sup>ただし、これらの地域における住民のほとんどはアタヤル人として登録しており、セデック人と自己認知している人は少ない状況にある。

言語の使用状況および体系の記述を進め、後にこの言語を「宜蘭クレオール (Yilan Creole)」とネーミングし (Chien and Sanada 2010)、調査研究を進行させている。

言語接触の結果として生まれたピジンやクレオールをめぐる研究は、言語の変化や言語の普遍性など言語の本質を探究する上で貴重な材料を提供してきた。ただし、これまでの研究事例では、主に欧米諸語を基盤としたピジン・クレオールが取り上げられるのが一般であった。環太平洋地域のピジン・クレオールについて論じている Ehrhart and Mühlhäusler (2007) においても、台湾での状況については触れていないのである。これまでの研究で取り扱われた言語の種類・系統とは異なる、このアタヤル語と日本語の接触による「宜蘭クレオール」の解明は斯界に貴重な研究事例を提供するものとなる。

本稿では、この「宜蘭クレオール」の体系記述の一環として、否定辞を取り上げて考察をおこなう。以下、まず「宜蘭クレオール」の概況を紹介し、その形成にかかわる歴史的・社会的背景について記す (§2)。ついで調査の概要を述べ (§3)、調査で得られたデータに基づいて「宜蘭クレオール」の否定表現全般に関する分析をおこなう (§4)。その上で「宜蘭クレオール」の否定辞 *nay* と *ng* の使用をめぐる規則性を明らかにし (§5)、その変容のメカニズムについて論じることとする (§6)。

## 2. 宜蘭クレオールについて

ここでは、Chien and Sanada (2010) および簡・真田 (2010) に基づき、宜蘭クレオールについて概説する。

### 2.1. 宜蘭クレオールの分布、名称、人口数

宜蘭クレオールは、台湾東部、宜蘭県の大同郷寒溪村と南澳郷東岳村・金洋村・澳花村など4つの村を中心に使われている<sup>2</sup> (図1)。

この「宜蘭クレオール」に対して、地元ではさまざまな呼称が存在する。例えば、

寒溪村：kangke no ke, kangke no hanasi, nihongo, 寒溪泰雅語<sup>3</sup>

東岳村：tang-ow no ke, tang-ow no hanasi, nihongo, 地方語言

<sup>2</sup> 大同郷と南澳郷での4村以外の村では伝統的なアタヤル語が使われているのであるが、言語的な多様性が著しく、村ごとにバリエーションが存在し、さまざまなアタヤル語の分岐が認められる。伝統的なアタヤル語からはかなり変容しているのである。伝統にこだわらずに新しいものをどんどん取り込んでいくといった進取性がこの地にはあるのではないかと思われる。そういった伝統的なものにあまり拘泥しない宜蘭の風土がクレオールを発展させた素地なのではないか、とわれわれは考えている。

<sup>3</sup> 「原住民族語」の復興をはかる政策の一環として、2007年から「原住民族生升學優待取得文化及語言能力證明考試」に合格した者には高校や大学入学試験の点数が35%プラスされるという政策が打ち出された。この検定試験では当初宜蘭県の大同郷と南澳郷の一部の村で話されている言語変種は含まれていなかったが、2006年の春に大同郷寒溪村の住民が積極的に自分たちの「言語権」を主張した結果、その言語変種がアタヤル語(泰雅語)の一方言(「寒溪泰雅語」として認められ、検定試験に加えられることになった(娃丹・部拉路揚2006)。しかし、2009年7月22日に寒溪アタヤル語の位置づけに関する会議が開催され、検討の結果、2011年度からは検定試験から排除されることが決定した(陳2010)。

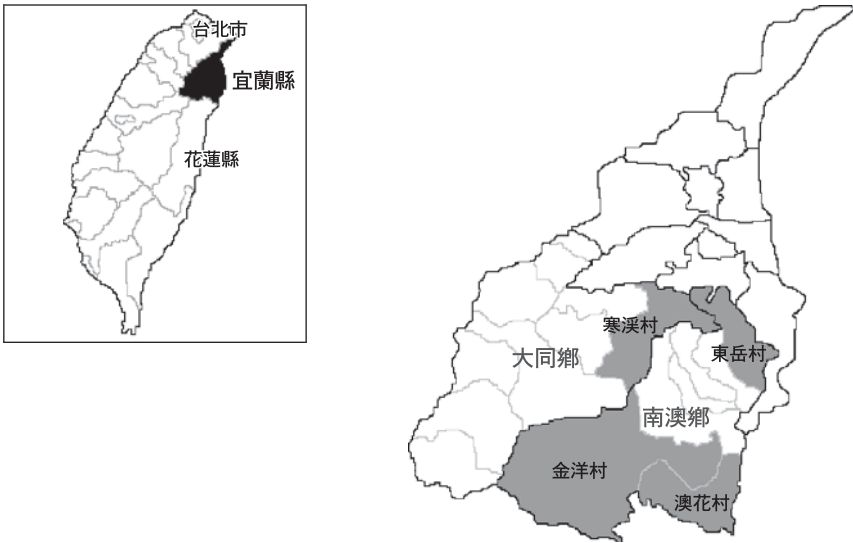


図1 宜蘭クレオールの分布

金洋村：kinus no hanasi, 博愛路的話

澳花村：zibun no hanasi, nihongo, 日本土話

のごとくである。一般には、アタヤル語よりはどちらかといえば日本語だと捉えている人が多い。ただし、例えば1936年生まれ、地元の校長あがりの男性のように、「これはわれわれの母語ではあるが、日本語そのものではない。われわれの母語と正式な日本語とはまったく別のものである」と述べて、宜蘭クレオールと日本語との違いを明確に認識している人もいる。

なお、真田・簡(2007, 2008ab, 2009)では、「日本語を語彙供給言語 (lexifier) として形成されたクレオール」という意味合いで、「日本語クレオール」と称して報告してきたのだが、これを即「日本語変種」として誤って受け取られている状況をやや危惧もしている。「クレオール」と認定する以上、われわれはこれを独自の言語と捉えているわけである。実際、伝統的アタヤル語を母語とする話者も日本語を母語とする話者も、この言語を聞いてほとんど理解することができない。そのように、体系が極度に再編成されているのである。その点を種々検討した上で、われわれは、この言語変種を「宜蘭クレオール (Yilan Creole)」と呼ぼうという結論に達したのである。

宜蘭クレオールの話者数に関しては、正確につかむことが難しい。ただ、人口統計によると、寒溪村・東岳村・金洋村・澳花村4村の人口は2010年12月現在3,325人となっている<sup>4</sup>。村内部にも宜蘭クレオールを使用しない地域があること(例えば

<sup>4</sup> 人口数は宜蘭縣政府民政局 (<http://hrs.e-land.gov.tw> (2011/1/11 アクセス)) による。

金洋村の金洋路) や宜蘭クレオールの話せない若年層がいることなどを考えると、現在の宜蘭クレオールの話者数は3,000人以下であると推定される。

## 2.2. 宜蘭クレオールの使用状況

宜蘭クレオールの使用には地域差や個人差が存在しているが、ここでは、東岳村を取り上げる。当該地での言語運用の傾向について、おおまかにまとめると、表1のようになる。

表1 東岳村における言語使用の概況

生年			
1930s ~ 1940	1940s ~ 1950	1950s ~ 1970s	1980 年以降
(アタヤル語／セデック語) (日本語) 宜蘭クレオール	宜蘭クレオール (中国語)	宜蘭クレオール 中国語	(宜蘭クレオール) 中国語

( ) は全体的に該当言語がほかの言語ほど使われていないことを示す。

表1から、まず宜蘭クレオールを日常生活の中で頻繁に運用するのは高年層と中年層であること、中国語(台湾では「国語」「華語」と呼ばれている)に圧倒される中で若年層には受け継がれなくなりつつあることが指摘できる。

高年層については、日本語教育を受けたかどうかによって、1930年代～1940年生まれ、1940年代～1950年生まれ、の2つのグループに分けた。1940年以前に生まれた人の中には、日本語が話せる人が多く、この世代はまた宜蘭クレオールも流暢に操っている。ただし、エスニックグループ言語としてのアタヤル語、およびセデック語が話せない人が多い。例えば、1936年生まれの男性は、幼いころから両親とは「日本語」で話してきたためにアタヤル語はほとんど話せないと言う。また、親の話した「日本語」は学校で習った「日本語」とは異なってアタヤル語の要素が混じっていたとも内省している。

この1936年生まれの男性の親世代(1910年代～1920年代生まれと推定)が使っていた「日本語」は現在の宜蘭クレオール形成直前の段階の接触言語(contact language)なのではないかと考える。アタヤル人とセデック人がそれぞれに居住していた山奥から現在の東岳村に移り住んで共同生活を始めたのは1913年からのことであるが、その2年後の1915年に「教育所」が設置され(宜蘭廳1918)、この地で日本語教育が始まった。お互いに通じ合わない異なった言語を使用するアタヤル人とセデック人が、コミュニケーションをとるために、その「教育所」で、あるいは日本人との接触の中で身に付けた簡略な日本語を、互いのリングフランカ(共通言語)として使い始めたのではないかと推測される。しかし、日本語がまだ完全に普及していなかったため、アタヤル語とセデック語の要素が混じったハイブリッドな言語が形成された。そして、その言語を第一言語とする世代が生まれ、その後、

それがクレオールへと発展したのだと考えるのである。

1940年代～1950年、また1950年代～1970年代生まれの多くは、幼い頃から宜蘭クレオールを使ってきたと言う。例えば、東岳村生え抜きの1947年生まれ的女性は、幼い頃から両親(1924年生まれ・1925年生まれ)と宜蘭クレオールを使ってきたし、子供たち(1960年代～1970年代生まれ)とも宜蘭クレオールで話していると証言している。

なお、1980年以降生まれの世代では、その多くは宜蘭クレオールが話せなくなり、中国語が主要言語となっている。台湾原住民族語の多くが消滅しつつあるのと同様、この宜蘭クレオールの話者も減少していることは確かである。

### 2.3. 宜蘭クレオール形成の歴史的・社会的背景

クレオールを使用する4つの村の住民たちは、もともとは宜蘭県南澳郷の山奥にそれぞれ分かれて住んでいた人たちである。かつて山の中で狩猟採集を中心とした生活をしてきた。その後、日本植民地当局は、1910年代から宜蘭地域においても原住民族集団移住政策を推進した。山奥で暮らしていた人々を、支配しやすくするために、交通の便のいいところに集住させるという政策である。その過程で、同じ地区にありながらも個別に生活していたアタヤル人とセデック人が新たな集落にまとめられたのである。

アタヤル語とセデック語は、いずれもアタヤル語群に属してはいるが、互いの間ではほとんど通じ合わないくらいに異なっている(李1996)。ことばが通じ合わない人たちが集住することを植民地当局は配慮しなかったようで、同じアタヤルの仲間ということで両者を一つのコミュニティに集住させたのである。そのことがこの地でのクレオール形成の直接の要因であると考えられる。

### 2.4. 宜蘭クレオールの言語的特徴

宜蘭クレオールの言語的特徴に関して、音韻体系や韻律はアタヤル語と基本的に同様であることが分かっている(Chien and Sanada 2010)。語彙については、1964年生まれ男性を対象とした調査のデータから、基礎語彙<sup>5</sup>の約65%が日本語起源の語、約25%がアタヤル語起源の語、そして残りの約10%が中国語と閩南語からの流入による語であることを現時点で把握している。

以上の点を勘案すると、宜蘭クレオールにとっては、アタヤル語が基層言語<sup>6</sup>、日本語が上層言語(語彙供給言語)、そして、中国語と閩南語が傍層言語であると見なすことができるのである。なお、日本語に関しては、taru(足る)、oru(おる)、

<sup>5</sup> 基礎語彙とは、日常生活の大部分をまかなうことのできる語彙と考える。調査では、峰岸(2000)の「言語調査票」を用いた。

<sup>6</sup> 1930年代における南澳地域の人口比率は、アタヤル人85.7%、セデック人14.3%である(移川ほか1935)。宜蘭クレオールにセデック語の影響が少ないのは、このようにセデック人がマイノリティであったことが関与していると考えられる。

taku (煮る) など、西日本方言の語形が多く使用されていることが特筆される。

### 3. 調査概要

宜蘭クレオールは、アタヤル語の母語話者も日本語の母語話者もそれを聞いてほとんど理解できない。アタヤル語要素と日本語要素が再編成を経て、クレオール独自の体系を作り上げているのである。

われわれは、この宜蘭クレオールの記述調査を2006年2月以降、断続的におこなっているが、本稿では、クレオールとしての独自の体系構築を示す具体的事象として、否定辞にかかわる新しい範疇の形成をめぐる考察ことにしたい。

インフォーマントは、東岳村生え抜きの1974年生まれの女性(Y氏)である。Y氏は日本語がまったく話せない。宜蘭クレオールを第1言語として育ち、宜蘭クレオールと中国語とのバイリンガルの言語生活を送っている。考察に当たっては、同村の1951年生まれの男性、および1947年生まれの女性によるデータも参考にする。

調査は、中国語文の翻訳という形でおこなっている。なお、データ表記は台湾行政院原住民族委員会と教育部が2005年12月に公布した原住民族言語表記法のアタヤル語書写系統に従う。

## 4. 宜蘭クレオールの否定表現

以下、具体的に、名詞文、動詞文、形容詞文の順に考察していく。

### 4.1. 名詞文

宜蘭クレオールの名詞文の否定表現は、次のようになる。

- (1) are hana cigo. are ga kusa. (あれは花じゃない。あれは草だ。)
- (2) koci karenko cigo. koci ga girang. (ここは花蓮じゃない。ここは宜蘭だ。)
- (3) wasi sensey cigo. wasi ga seto. (私は先生じゃない。私は生徒だ。)
- (4) are sensey cigo rasye<sup>7</sup>. (彼は先生じゃないだろう。)
- (5) seto cigo no ninggen, maye koy. (生徒じゃない人、前に来なさい。)

(1)~(5)に示すように、名詞文の否定には語彙的な否定形式の cigo が用いられる。この cigo は、日本語の「違う」に由来する形式である。

以上のような、名詞に「違う」を後接させて否定を表す用法は、台湾高年層の用いている、いわゆる台湾日本語にも観察される場所である(簡2003)。

過去テンスについては、次のような使用が観察される。

- (6) are lela ga sensey cigo. (彼は先生じゃなかった。)
- (7) are lela keysacu cigo. (彼は警察官じゃなかった。)
- (8) aci lela gago cigo. (あそこは学校じゃなかった。)

<sup>7</sup> rasye は日本語の「らしい」に由来する形式で、ある程度の根拠のある推量を表すものである。

(6) ~ (8) で注目を引くのは、過去テンスが時間副詞 *lela* (「かつて」の意) で語彙的に表されているという点である。このような用い方は宜蘭地域で使われている伝統的なアタヤル語 C'uli' 方言の影響なのではないかと考えられる。宜蘭アタヤル語 C'uli' 方言では、上の用例 (6) に対して、(6') のように表現する<sup>8</sup> (コンサルタントは 1954 年生まれの男性である)。

- (6') *lela ga iyat sensi hiya.*  
 かつて トピックマーカー 否定詞 先生 三人称代名詞  
 (彼は先生じゃなかった。)

用例 (6) とこの (6') を対照すると、宜蘭クレオールは、宜蘭アタヤル語 C'uli' 方言と同様に *lela* という時間副詞を用いて過去テンスを表していることが分かる。

以上を総合すると、宜蘭クレオールの名詞文に関して、次の 2 点が指摘できる。

- ① 否定表現については、日本語の「じゃない」を採用せず、「違う」に由来する *cigo* を用いる。
- ② 過去テンスは、日本語の「違う」の過去形「違った」などではなく、宜蘭アタヤル語 C'uli' 方言由来の時間副詞「*lela*」によってのみ表される。

すなわち、形態的な処理を要する表現が採用されず、語彙的な形式が使われているわけである。ここには明らかな構造再編が認められるのである。

## 4.2. 動詞文

動詞文の否定は、次のようである。(\* は非文を、? は話者間でゆれのあることを表す。)

- (9) *wasi kino tayhoku ikanay / \*ikang.* (私は昨日台北へ行かなかった。)
- (10) *are kino tayhoku ikanay / \*ikang.* (彼は昨日台北へ行かなかった。)
- (11) *nta kino tayhoku ikanay / \*ikang ga.* (あなたは昨日台北へ行かなかったか。)
- (12) *kyo no asa walaxsinay / \*walaxsang.* (今朝、雨が降らなかった。)
- (13) *wasi kyo no asa hayay okiranay / \*okirang.* (私は今朝早く起きなかった。)
- (14) *ima walaxsinay / \*walaxsang.* (今は雨が降っていない。)
- (15) *ima wasi pila mocanay / \*mocang.* (今、私はお金を持っていない。)
- (16) *are mada okiranay / \*okirang.* (彼はまだ起きていない。)
- (17) *wasi asta tayhoku \*ikanay / ikang.* (私は明日台北へ行かない。)

<sup>8</sup> 用例 (6) に対して、苗栗地域で使われている伝統的なアタヤル語 C'uli' 方言では、(6") のように表現する (コンサルタントは 1948 年生まれの男性である)。

(6") *slali ga iyat min-sinsi hiya.*  
 かつて トピックマーカー 否定詞 過去-先生 三人称代名詞  
 (彼は先生じゃなかった。)

本文での用例 (6') と照らし合わせてみると、過去テンスについて、苗栗のアタヤル語 C'uli' 方言では時間副詞 *slali* と接辞 *min* で表すが、宜蘭アタヤル C'uli' 方言では時間副詞 *lela* のみで表すという違いがあることが分かる。

- (18) are asta tayhoku ?ikanay / ikang. (彼は明日台北へ行かない。)  
 (19) kyo \*walaxsinay / walaxsang rasye. (今日は雨が降らないだろう。)  
 (20) wasi kyo hontoni \*tamasinay / tamasang hayya. (私は今日絶対にタクシーに乗らない。)  
 (21) kilux. \*arukusinay / arukusang mo. (暑い！もう歩きたくない。)

以上の用例のうち、(9)～(13)は「過去」、(14)～(16)は「現在」、(17)～(21)は「未来」のことを表すものである。この使用状況からは、「過去」と「現在」には否定辞 *nay* のみが使われ、*ng* を使うと非文になり、一方、「未来」には否定辞 *ng* のみが使われ、*nay* を使うと非文になることが分かる。

すなわち、ここには、

$nay : ng = \text{「過去」} : \text{「現在」} : \text{「未来」}$
--

といった使い分けに関する相補的分布が存在すると言えそうである。

ただし、発話例(18)に示したように、高年層では、未来の事態や行為においても、第3者に関する客観的な描写に限って *nay* を許容する人が存在する。これは、このような文脈において、*nay* と *ng* が併存していた可能性を示唆するものである。

なお、インフォーマントは、次のような発話例に関して、殺していないと明白に知っていることを言う場合((22))には「殺さナイ」を、一方、これからのことで、殺すか殺さないか分からないが推測で言う場合((23))には「殺さん」を用いる、と内省している。

- (22) are welung korosanay / \*korosang. (彼は鶏を殺さナイ〈殺していないことを知っている〉。)  
 (23) are welung \*korosanay / korosang. (彼は鶏を殺さん〈これからのことで、推測だが〉。)

以上のことを鑑みるに、*nay* が用いられる発話例は、いずれも発話時、ないし発話時より前(すなわち既然)の事態や行為を描写するものであり、*ng* が用いられる文例はいずれも発話時より後(すなわち未然)の事態や行為を描写するものであることが理解されるのである。

総合すると、ここには、

$nay : ng = \text{「既然の事態・行為」} : \text{「未然の事態・行為」}$
--

といった、使い分けの規則性を見出し得るのである。

#### 4.3. 形容詞文

形容詞文の否定は、次のようである。(\*は非文を表す。)



- (24) kino samuysinay / \*samuysang. (昨日は寒くなかった。)  
 (25) kino kiluxsinay / \*kiluxsang. kosi samuy. (昨日は暑くなかった。少し涼しかった。)  
 (26) kino wasi no nba kukuy. imato kukuysinay / \*kukuysang mo. (昨日は手が痒かった。でも今はもう痒くない。)  
 (27) ima samuysinay / \*samuysang. (今は寒くない。)  
 (28) kyo kiluxsinay / \*kiluxsang. samuy. (今日は暑くない。涼しい。)  
 (29) kore yasay takaysinay / \*takaysang. (この野菜は高くなっていない。)  
 (30) asta \*samuysinay / samuysang. (明日は寒くない。)  
 (31) tenki mo \*kiluxsinay / kiluxsang. (お天気は暑くならない。)  
 (32) dare yuta yasay takaysuru no. \*takaysinay / takaysang mo. (野菜が高くなるのって誰が言った? もう高くないよ。)

(24) ~ (26) は「過去」、(27) ~ (29) は「現在」、(30) ~ (32) は「未来」を表すものである。これらの用例から、まず、形容詞では、基本形に sinay (「シナイ」) と sang (「さん」) のいずれかを直接付加して否定が表されていることが読み取れる。

sinay と sang は、いずれも日本語のサ変動詞「する」に否定辞「ナイ」と「ン」を接続させて形成されたものと考えられる。日本語では否定辞の「ナイ」と「ン」は動詞にしか使用できないのであるが、ここに見るように、nay と ng は形容詞にまでその使用領域を拡大している。すなわち、否定表現では形容詞が動詞として範疇化されているわけである。この点が宜蘭クレオールの大きな特徴の一つと言える。

次に、用例からは、

<u>sinay</u> : <u>sang</u> = 「既然の事態・行為」: 「未然の事態・行為」
---

という使い分けに関する相補的分布の存在が指摘される。この -nay と -ng の使い分けの規則性は前節で取り上げた動詞の場合と同様である。こうした規則性の形成については後に論じることにする。

さらに、(24) ~ (26) 「過去」テンスの用例からは、上述の名詞文・動詞文と同様に、テンスに関しての形態論的な処理がなされず、時間副詞で語彙的に表すことも分かるのである。

なお、sinay と sang の形態に関して触れておきたい。nay が未然形の「し」に接続するのは分かるとして、なぜ、ng が「せ」ではなく「さ」に接続しているのだろうか。この点については、高年層の用いる、いわゆる台湾日本語での状況から納得ができるのである。簡 (2006) では、台湾高年層の残存日本語に標準語形 ナイ と方言形が使用されていることを指摘した上で、その併用状況を分析して、「ナイ」は -a, -i, -e, -o のいずれにも接続しているが、「ン」の接続は -a に限られていることを明らかにしている<sup>9</sup>。このパラダイムに従えば、「ン」のサ行における接

<sup>9</sup> 台湾高年層の日本語においては、一段・カ変・サ変動詞の場合、ナイは使われるがンは使わ

続が宜蘭クレオールで sang (「さん」) へと再編成されたこともうなずけるのである。台湾日本語と宜蘭クレオールは連続体をなしているわけである。

## 5. 否定辞 nay と ng の使い分けの規則性

上述した,

nay : ng = 「既然の事態・行為」: 「未然の事態・行為」

といった、使い分けの規則性の形成については、表2に示したようなプロセスを想定することが可能である。

表2 宜蘭クレオール否定辞形成のプロセス

【台湾日本語】		
過去	現在	未来
ナカッタ／ー	ナイ／ン	
↓		
【宜蘭クレオール (A)】		
既然	未然	
nay	?nay / ng	
↓		
【宜蘭クレオール (B)】		
既然	未然	
nay	ng	

表2に示したように、かつての台湾日本語には標準語形「ナイ」と地域方言形「ン」が併存していた。「ナイ」の過去形は「ナカッタ」であるが、「ン」の過去形は使われなかった（日本語における「ン」のかつての過去形「ナンダ」は、われわれの高年層に対する残存日本語の調査でも捕捉していない。おそらく台湾では「ナンダ」は普通には用いられなかったのであろう）。

そのような背景のもとで、この地に形成された宜蘭クレオールにおいては、名詞文の否定表現と同様に、述語に過去形を使わず、時間副詞で過去を明示し、動作などは現在形にするという宜蘭アタヤル語 C'uli' 方言のパラダイムが採用される過程で、「ナカッタ」の現在形である nay が抽出され、それが「既然」の範疇において使われるようになった。

---

れない。一方、五段動詞の場合、ナイとンの両方が使われる（簡 2006）。

ただし、「未然」については、最初 *nay* と *ng* が併存していたと推測される。前掲の発話例 (18) のように、現在の高年層では、未然の事態や行為においても、特に客観的な描写に限って *nay* を許容する人が存在するからである (表2の【宜蘭クレオール (A)】の段階)。

その後、中年層以下の世代においては、合理化による体系の再編成がおこなわれ、*nay* と *ng* が、「既然の事態・行為」と「未然の事態・行為」に対応する形で用いられるに至った (表2の【宜蘭クレオール (B)】の段階) と推測される。この点に関する用例を追加しつつ、さらに詳しく論じることにはしたい。

## 5.1. 既然の事態・行為

### 5.1.1. 「過去」の事態や行為

既然の事態・行為のうち、「過去」の事態や行為において *nay* が使われる用例には、上掲の発話例のほか、次のようなものがある。

- (33) *wasi lela sukanay niku taberu no.* (私がかつて肉を食べるのが好きではなかった。)  
 (34) *wasi kino ngasang oranay.* (私は昨日家にいなかった。)  
 (35) *kyo no asa nanimo tabenay.* (今朝、何も食べなかった。)

### 5.1.2. 「現在」の事態や行為

既然の事態・行為のうち、「現在」の事態や行為において *nay* が使われる用例には、次のようなものがある。いずれも、現在それが進行中であることを表している。なお、(古) と記した形式は高年層世代の用語で、1974年生まれのインフォーマントにとっては古めかしい言い方とされるものである。

- (36) *wasi no otoko ima ngasang oranay.* (私の夫は今家にいない。)  
 (37) *ima walaxsinay.* (今は雨が降っていない。)  
 (38) *wasi ima tienshish miranay<sup>10</sup> / mitenay* (古)。 (私は今テレビを見ていない。)  
 (39) *wasi mada gwahang tabenay / tabetenay* (古)。 (私はまだご飯を食べていない。)  
 (40) *are mada okiranay / okitenay* (古)。 (彼はまだ起きていない。)  
 (41) *mada neranay / netenay* (古)。 (まだ寝ていない。)

これらの用例においては、*nay* のほかに *-tenay* (「～テナイ」) も使われている。助詞を介した *-tenay* という形式について、インフォーマントは「これは古い言い方で自分はあまり使わない。自分の世代では *nay* とのみ言うことが多い」と内省している。したがって、中・青年層世代では、*-tenay* を *nay* に収斂させる動きが進行し

<sup>10</sup> *miranay* や *okiranay*、*neranay* などはいわゆる一段動詞の五段化で、単純化による変化である。これはすべての年齢層に認められる。ただし、*tabenay* のように五段化しない動詞も存在する。*tabenay* には *tabesinay* というバリエントが観察される。

ていると言える。

この現象に関して、高年層の人々は、「この頃の若い者のことばは少し乱れている」として、「例えば、tabetenayと言わずに tabenay と、変なことばづかいをする」と非難するのである。しかし、この変化は、まさに単純化（合理化）への流れとして位置づけることができるものである。

日本語が身近であった高年層の人々には許されないことであっても、日本語に馴染みのない若い人たちは、自分の使いやすいようにことばを合理的に変容させて新しい体系を作り出しつつあるわけである。

## 5.2. 未然の事態・行為

これは、その事態や行為が、時間の流れの中で、将来起こるものとして捉えられるものである。そこでは、「推量」や「意志」などが表される。

### 5.2.1. 「推量」

ng によって「推量」が表される用例には、次のようなものがある。

- (42) are asta orang rasye. (彼は明日いないだろう。)  
 (43) are ngasang cukurang rasye. (彼はもう家を造らないだろう。)  
 (44) kore la'i itazulasang. (この子は多分今後いたずらしない。)  
 (45) kyo no bang walaxsang. (今晚は雨が降らないと思う。)

第3者の事態や行為に関する推量であるが、(42) (43) のように rasye というモダリティ形式と共起することもあれば、(44) (45) のように ng が単独で用いられることもある。

### 5.2.2. 「意志」

ng によって「意志」が表される用例には、次のようなものがある。

- (46) wasi kyo nanimo yuwang. (私は今日何も言わない。)  
 (47) kyo no bang nomang. hong miru. (今晚は飲まない。勉強する。)  
 (48) wasi hontoni are sensey yuwang. (私は絶対に彼を先生と呼ばない。)  
 (49) A : sindeke. B : sinang. (A : 死ぬ！ B : 死なない！)  
 (50) nta asta tayhoku ikang ga. (あなたは明日台北に行かないか。)

(46) ~ (49) は動作者が第一人称の場合で、将来への動作者の決意が表現される。一方、(50) は、「行かないつもりか」と相手の意志を尋ねる場合の表現である。

## 6. おわりに——nay / ng 対立のメカニズム——

以上、本稿では、〈否定〉というジャンルに限定してではあるが、発話時、ないし発話時よりも前（已然）の事態や行為と、発話時よりも後（未然）の事態や行為

を、否定辞 *nay* と *ng* によって弁別して描写するといった体系化が宜蘭クレオールにおいて図られていることを明らかにし、その経緯について分析した。まとめると、表3のようになる。

表3 宜蘭クレオールにおける否定辞の体系

既然の事態・行為	未然の事態・行為
<i>nay</i>	<i>ng</i>

では、なぜこのような体系が構築されたのであろうか。そこには、アタヤル語が関与していると考えられる。

アタヤル語をはじめ台湾やフィリピンのオーストロネシア語族に属する言語には、印欧語におけるようなテンス (tense) に対応する概念を想定することは不適當で、モード (mode) とアスペクト (aspect) の組み合わせによった枠組みを想定すべきであり、その枠組みとは「既然法 (realis)」と「未然法 (irrealis)」であるとされる (亀井ほか 1996)。「既然法」とは、その事態ないし行為がすでにおこなわれている、あるいは、おこなわれたことを表し、「未然法」とは、その事態ないし行為がまだおこなわれていないことを表すものである。

したがって、宜蘭クレオールにおいては、基層言語であるアタヤル語の「既然法」「未然法」といった枠組みの中に上層言語である日本語の標準語形「ナイ」と地域方言形「ン」の2形式が巧みに取り込まれ、新しい体系が構築、形成されたと見なすことができるのである。

世界のクレオール研究においては、否定辞の形式や位置 (述語の前か後か) などに関する論述は多い (Holm 1988, Thomason 2001, Sakoda and Siegel 2003 など) が、本稿のような語彙供給言語の標準語形式と地域方言形式を相補させる形での体系構築を論じたものは、管見の限りはないようである。このような事象は世界的に見ても貴重な事例と言えよう。

## 参 照 文 献

- 安部清哉・土田滋・新居田純野 (2008) 「アタヤル語 (泰雅語) の寒溪方言に入った日本語—台湾原住民言語能力試験問題における—」『東洋文化研究』10: 696-730.
- 陳威任 (2010) 「族語認證明年排除寒溪泰雅語」『台湾立報』4月11日 (<http://www.lihpao.com/?action-viewnews-itemid-4367>) (2010/4/12 アクセス).
- 簡月真 (2003) 「台湾に残存する日本語の動詞の文法カテゴリー」簡月真・渋谷勝己 (編) 『環太平洋地域に残存する日本語の諸相 (2) —台湾—』41-75. 文部科学省特定領域研究「環太平洋の「消滅」に瀕した言語」にかんする緊急調査研究」成果報告書.
- 簡月真 (2006) 「台湾残存日本語にみられる否定辞『ナイ』と『ン』—花蓮県をフィールドに—」『日本語科学』20: 5-25.
- Chien, Yuehchen and Shinji Sanada (2010) Yilan Creole in Taiwan. *Journal of Pidgin and Creole Languages* 25(2): 350-357.
- 簡月真・真田信治 (2010) 「東台湾泰雅族の宜蘭克里奧爾」『台湾原住民族研究季刊』3(3): 75-89.
- Ehrhart, Sabine and Peter Mühlhäusler (2007) Pidgins and Creoles in the Pacific. In: Osahito Miyaok,

- Osamu Sakiyama and Michael E. Krauss (eds.) *The vanishing languages of the Pacific Rim*, 118–143. Oxford: Oxford University Press.
- 宜蘭廳 (1918)『宜蘭廳統計要覽 大正五年』宜蘭：宜蘭廳。
- Holm, John (1988) *Pidgins and Creoles*. Vol.1. Cambridge: Cambridge University Press.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) (1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京：三省堂。
- 李壬癸 (1996)『宜蘭縣南島民族與語言』宜蘭：宜蘭縣政府。
- 峰岸真琴 (2000)『言語調査票 2000年版』文部科学省特定領域研究「環太平洋の『消滅に瀕した言語』にかんする緊急調査研究」総括班成果物 ([http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki\\_gen/query/aaquery-1.htm](http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/query/aaquery-1.htm)) (2009/7/15 アクセス)。
- Sakoda, Kent and Jeff Siegel (2003) *Pidgin grammar: An introduction to the Creole English of Hawaii*. Honolulu: Bess Press.
- 真田信治・簡月真 (2007)「台湾アタヤル族における日本語クレオール」『日本語学会 2007年 春季大会予稿集』167–174。
- 真田信治・簡月真 (2008a)「台湾における日本語クレオールについて」『日本語の研究』4(2): 69–76。
- 真田信治・簡月真 (2008b)「台湾の日本語クレオール」『言語』37(6): 94–99。
- 真田信治・簡月真 (2009)「再び台湾—日本語ベースのクレオール」真田信治 (著)『越境した日本語—話者の「語り」から—』98–116。大阪：和泉書院。
- Thomason, Sarah G. (2001) *Language contact: An introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 土田滋 (2008)「日本語ベースのクリオール—アタヤル語寒溪方言—」『台湾原住民研究』12: 159–172。
- 移川子之藏・宮本延人・馬淵東一 (1935)『臺灣高砂族系統所屬の研究』東京：刀江書院。
- 娃丹・部拉路揚 (2006)「泰雅寒溪方言，要求族語納入認證範圍」『原住民新聞雜誌』 ([http://web.pts.org.tw/php/news/abori/view\\_abori.php?HTENO=229&HBENO=2558&DETAIL=1&TB=ABORI\\_POINTNEWS](http://web.pts.org.tw/php/news/abori/view_abori.php?HTENO=229&HBENO=2558&DETAIL=1&TB=ABORI_POINTNEWS)) (2010/3/19 アクセス)。

執筆者連絡先：

[受領日 2011年2月1日

簡月真

最終原稿受理日 2011年5月24日]

台湾花蓮縣壽豐鄉志學村大學路2段1号

國立東華大學原住民族學院

chienyc@mail.ndhu.edu.tw

真田信治

〒631-8502 奈良市山陵町1500

奈良大學國文學科

sanadas@daibutsu.nara-u.ac.jp

## Abstract

**Negation in Taiwan's Yilan Creole:  
Focusing on *-nay* and *-ng***

YUEHCHEN CHIEN

*National Dong Hwa University, Taiwan*

SHINJI SANADA

*Nara University/NINJAL*

In Taiwan, contact between Atayal and Japanese has produced a little known creole which we have named 'Yilan Creole'. It is spoken by indigenous residents living in Yilan County in Eastern Taiwan. In this paper we first outline the sociohistorical background of Yilan Creole to establish that it is indeed a creole. We then attempt to clarify the linguistic nature of Yilan Creole through an examination of the usage of negation. The results of our analysis indicate that the negative *-nay* (based on a Standard Japanese form) occurs in expressions of past and present states and actions, while the negative *-ng* (based on a Western Japanese dialectal form) occurs in expressions of future states and actions. We attribute this usage pattern to the influence of the categories 'realis' and 'irrealis' in the Atayal language. The negation system of Yilan Creole developed by restructuring the Japanese forms to reflect these Atayal grammatical categories.